

Title	慶應義塾図書館蔵慶長六年十二月十九日和漢聯句「堂のすみより」注釈： 新出の直江兼統主催の和漢聯句
Sub Title	
Author	川崎, 美穂(Kawasaki, Mion)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2018
Jtitle	三田國文 No.63 (2018. 12) ,p.47- 68
JaLC DOI	10.14991/002.20181200-0047
Abstract	
Notes	図削除
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20181200-0047">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20181200-0047</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 慶應義塾図書館蔵慶長六年十二月十九日和漢聯句「堂のすみより」注釈

——新出の直江兼続主催の和漢聯句——

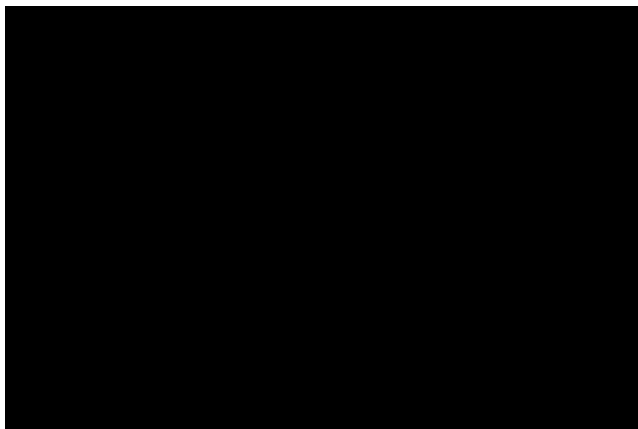
川崎 美穂

はじめに

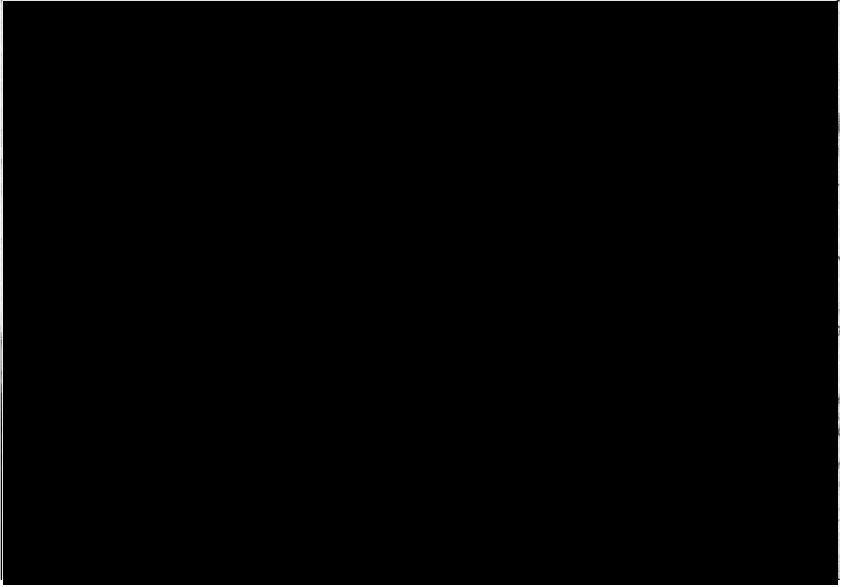
本稿は、慶應義塾図書館に蔵される和漢聯句百韻を取り上げ翻刻と注釈を試みたものである。本百韻の存在は、米沢の郷土史家今井清見氏が『直江城州公小伝』（慧文社、二〇〇八年〔初版一九三七年〕）において指摘したのが最初である。だが、全百韻のうち冒頭の三句が掲出されるのみで、出典の明記もなく、その全貌は長らく不明であった。

ところが、今井氏の『直江筋書』第二巻に百韻全ての書写がその自筆によって残されていることが判明した。さらに、慶應義塾図書館に蔵されている「慶長六年十二月十九日兼続元貞等『夢想和漢聯句』」こそがその百韻の懐紙原本であると目され、今井氏が『直江筋書』に書写した際に実見した可能性も極めて高い。

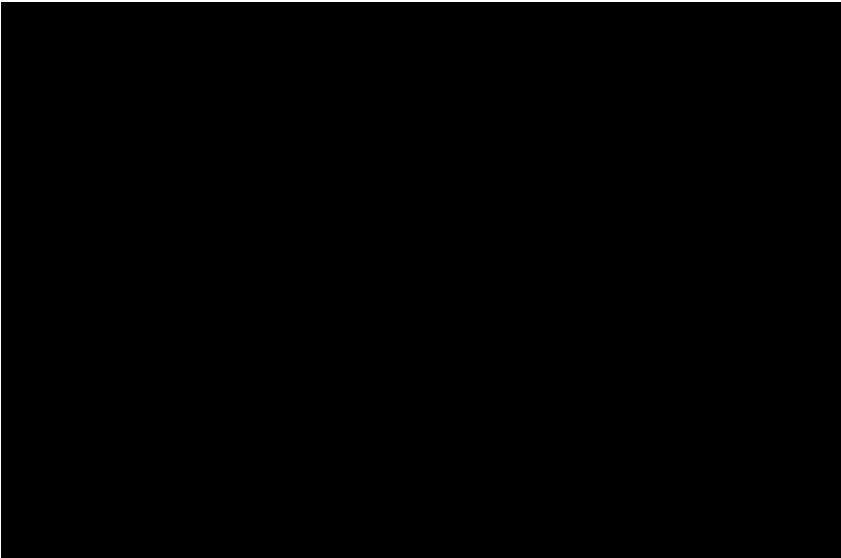
当該和漢聯句は、関ヶ原の合戦後、西軍を援護したがために、米沢に三十万石で減封された慶長六年に興行され、政治的に重要な時期にあり注目される。且つ、原本の所在と詳細が明らかとなったことで高い史料的价值をも有すると考え、ここに



図版1 端作（慶應義塾図書館蔵）



図版2 初折才



図版3 句上

※  
転載  
禁止

本文を掲げ注釈を施した。<sup>(4)</sup>

## 一、書誌及び連衆

まず書誌を記す。慶應義塾図書館蔵（請求記号110X②189  
◎1）。『慶應義塾図書館和漢貴重書目録』（慶應義塾図書館編、  
二〇〇九年）に記載の書名は「慶長六年十二月十九日兼統元貞  
等「夢想和漢聯句」。一紙は縦一八・八糎、横五三・五糎で計  
八紙。斐楮。内曇り（上藍、下紫）が施される。二ツ穴に水引  
で綴じ<sup>5</sup>る。裏打補修あり。85句・92句・93句・98句は一部また  
は全てが摩滅し判読不能な箇所がある。なお、この摩滅は今井  
氏の記録と一致する。今井氏の記録によれば、中山小太郎氏が  
旧所蔵<sup>(5)</sup>。

次に本百韻の連衆と句数を句上に従って挙げれば次のように  
なる。懐紙に記される名を掲げた後、（ ）内に句数を示した。  
生没年が分明な者は興行時の年齢を記した。なお、当該百韻の  
連衆と翌年の慶長七年に催された「亀岡百首」の参会者は□で  
囲んだ<sup>(6)</sup>。

### 《連衆》

・御（和二）…直江兼統が感得した夢想の句か（後掲の「注釈」  
にて詳述）。

・兼統（漢十三）…直江山城守兼統。上杉家家宰。上杉景勝に

近侍。この時、四十二歳。

・元貞（漢十二）…中堀入道元貞。上杉家家臣か。

・富隆（和八）…八王子民部少輔富隆。上杉家家臣か。

・隠其（和九）…越後称念寺隠居、元越後府中時宗寺院の住職。  
・実頼（和十）…大国但馬守実頼。直江兼統の実弟。能書、連  
歌の上手と評される。大国家の養子となり大国と改称。飛鳥  
井雅庸の門弟。紹巴、元斎、佐河田昌俊らとの交流あり。文  
禄三年九月の都の連歌会では執筆役を務める。本作品の翌  
年、「亀岡文殊堂奉納詩歌百首」（以下「亀岡百首」と略記）  
では和歌の部の出題者<sup>(6)</sup>。

・印金（漢十）…伝未詳。上杉家の連歌・聯句会では当該作品  
において初めて出座が確認される。

・朝清（漢八）…宇津江九右衛門朝清。直江直属の与板衆（与  
板城時代からの側近）。『詠歌大概』『百人一首』『古文真宝』  
を自ら書写。「連歌師長珊撰五十番歌合」を伝える。

・能元（和八）…安田上総介能元。国衆、旧族。越後、安田城  
主の治部少輔長秀の一族。会津時代、大石播磨守、岩井備中  
守と並んで会津三奉行の一人とされていた。

・其阿（和七）…僧。会津若松東明寺其阿弥。時宗寺院。翌年  
の「亀岡百首」で和歌を詠む。

・信能（和七）…岩井備中守信能。新たに景勝直属の旗本とな  
った。後、信州飯山城主となるが再び近侍として会津三奉行  
の一人と目され米沢に供奉。天正九年、毛利秀広が私恨によ  
り山崎秀仙・直江信綱を殺害した時、主命により秀広を誅  
殺。

・秀定（漢八）…鮎川与五郎秀定。庄内羽黒山神職家の出身。  
天正十九年庄内藤島一揆討伐の時、景勝に帰服。当該作品で  
執筆を務めるか。

なお米沢で催された兼続のもう一つの文事である「亀岡百首」との関わりについて、木村氏は、次のように述べる。

米澤へ帰國後、幾程もなくして、同十二月十五日、其邸に於て、和漢聯句會を開き、景勝も之に臨み、主従和樂して、三十萬石に減封された年末とは思はず、兼続に對する景勝の信賴は益々加はつて居る。(略)翌慶長七年四月廿七日、米澤郊外三里の亀岡文殊堂に於て、僧泰安、及び安田能元、岩井信能等藩將士二十餘人と漢和百韻の雅會を開いて和樂した。これまた、如何に閩藩一致して、戦後の復興に努力したかを物語る史料ともなるであらう。当該百韻が興行された背景を裏付ける資料はないが、木村氏が推測するように、上杉家家臣団の結束を仰ぐべく企画されたとみるのが穩当だろう。

## 二、翻刻

### 《凡例》

- ・ 原本は一句を二行書きにするが、これを一行書きに改めた。
- ・ 句頭に通し番号を付し、通行の字体に改めた。
- ・ 破損などにより判読不能な箇所は□で示し、残画から推定される文字は「」で右傍に示した。
- ・ 紙移りは、連歌懷紙における通用の名称を用い「初オ」のように示した。

・ その他、翻刻の方針は、京都大学和漢聯句研究会『慶長・元和和漢聯句作品集』(臨川書店、二〇一八年)に拠った。

### 《翻刻》

慶長六年十二月十九日

夢想

和漢聯句

- 0 堂のすみより世にそ出ける
- 1 年を経てなをえの松そさかふるや
- 2 吟春臘底梅
- 3 詩簾先捲雪
- 4 雲に風ふく月のとを山
- 5 雁かねはさくらうへの峯こえて
- 6 波すさましき江のとまり舟
- 7 杳靄掩蘆屋
- 8 半庭弘緑埃
- 9 しら露の玉のを柳みたれあひ
- 10 そくも見えぬ春雨の空
- 11 おほるなる月の明かた雲引て
- 12 好友興相催
- 13 山自遠方到
- 14 嵐傍深戸推
- 15 まつ人はこぬ面かけの立うかれ
- 16 けふるはかりのおもひくるしも
- 17 袖にあまる涙は露をかことにて
- 18 荒村嘯月回

「(初折オ)

兼続 元貞 富隆 隱其 實賴 朝清 能元 其阿 信能 秀定 兼続 元貞 富隆 隱其 實賴 印金

19 壁間蛩唧々  
 20 ふもとの野辺の風さむきくれ  
 21 坐花紅染袂  
 22 斟杏緑浮醅  
 23 霞む日はとをくすむをも問よりて  
 24 遊轡苦驚駘  
 25 嶮棧常経蜀  
 26 靈方好覓萊  
 27 平之仙市鶴  
 28 かけも木たかく見ゆる松原  
 29 住吉や往來の袖のつゝくらむ  
 30 浦半の月になかめする暮  
 31 霧晴磯上顯  
 32 引あをとをし初塩の浪  
 33 種玉塵間鷺  
 34 いり日の末の野はかすか也  
 35 宿からむさとはたく火をしるへにて  
 36 旅過幾崔嵬  
 37 ほとゝきす声やそことも分さらん  
 38 ふりしきる夜の雨はものうし  
 39 ひとりぬる枕に風の音信て  
 40 忍履月相踏  
 41 沙砌露降湿

〔初折ウ〕

朝清 能元 秀定 兼統 実頼 朝清 印金 兼統 元貞 能元 信能 其阿 秀定 富隆 兼統 隱其 実頼 印金

〔二折オ〕

42 秋もくれまつ鞠のかたらひ  
 43 落楓舗地錦  
 44 下若画雲疊  
 45 白也出唐鳥  
 46 絲之入羽能  
 47 さすらふるその行衛こそ悲しけれ  
 48 一夜のほとに老となりぬる  
 49 不改旧花耳  
 50 はるをこゝろの哥のしなく  
 51 永日もしたしき中はそひあかて  
 52 おもふをゝきて旅たつはうし  
 53 載恨行舟重  
 54 投閑書卷開  
 55 まちいてゝ月にむかへる窓のうち  
 56 涼しくなれる秋のゆふ暮  
 57 なかれぬる汀の柳ちりそめて  
 58 一蓑帯雨来  
 59 泰雲雖寸々  
 60 まつるに神や世をめぐむらん  
 61 おさまれる國はやしろをいはひそへ  
 62 松於岩谷栽  
 63 遠鐘風是杵  
 64 芳茗雪其磴

〔二折ウ〕

实頼 印金 兼統 元貞 秀定 秀定 兼統 隱其 其阿 富隆 兼統 元貞 信能 其阿 朝清 元貞 富隆 兼統 其阿 兼統 印金

〔三折オ〕

兼統

65 禅識無能味  
 66 むまれなからにおこなへる道  
 67 鶯の巢をはなれすも声たてゝ  
 68 竹のはやしの春寒きころ  
 69 山すみも霞をくめる伴ひに  
 70 茅齋月作媒  
 71 妾衣先襯露  
 72 身にしめつゝもまつはいく秋  
 73 虚夕刻其歳  
 74 早天夏以雷  
 75 山たかみ雲のかさなる曙に  
 76 棹舟過水隈  
 77 ちりうかふ花や岸根に淀むらん  
 78 和暖杖徘徊

朝清 隱其 其阿 信能 富隆 秀定 元貞 実頼 兼統 印金 隱其 元貞 能元 兼統

89 舟過山走馬  
 90 くるゝあらしにはやき雲あし  
 91 笛近牧婦否  
 92 □ □ 女美哉  
 93 「「過来し□□□□もはれて  
 94 空閑日厚苔  
 95 岩かねにたえず雫や音すらむ  
 96 なかれはほそきさは水のすゑ  
 97 歌堯村校楽(鳴カ)  
 98 □ □ □ □ □ □  
 99 二月のなかはの花を折かたし  
 100 春到必豊財

印金 隱其 朝清 元貞 能元 秀定 信能 其阿 兼統(印金カ) 実頼 朝清

「(三折ウ)

御二句  
 兼統 十三 朝清 八  
 元貞 十一 其阿 七  
 富隆 八 信能 七  
 隱其 九 秀定 八  
 実頼 十  
 印金 十  
 其阿  
 兼統  
 信能  
 富隆

三、注釈

翻刻は、各句に通し番号を打ち、濁点も訓点もない原本のま

まの形で示したが、注釈において、句を掲げる際には、私に濁点、及び振仮名を施し、作者を記した。漢句の場合には、作者の前に読み下し文を、句の右傍に平仄を記載した。注釈は、まず前句との関係を寄合語、句意の点から説明した後、一句の中で使われている語句に関する注を和歌、連歌、和漢聯句における用例を引きながら適宜記した。必要あれば、考察もここに記述した。韻字は、『漢和三五韻』、『和訓押韻』を参照し、そこに掲げられる訓を読み下し文に記した。注釈末尾に、季節とその季に認定した語句を（ ）内に記した。

#### 0 堂のすみより世にぞ出ける

当該句は「夢想」の句、つまりその場に居合わせる連衆の句ではなく、神仏からの啓示を受けた句とみなして書かれた句である。『兼載雑談』に「一、夢想の事。下句を見れば面九句にして。夢想の句とにも百一句たるべし。夢想の会の句引に。発句に神一句と書。又は御の字をかく事可依事なり。神慮のやうに見ば可然なり。我したると見ば。我名を可書となり。」とあり、当該作品はこの句を含めて全一〇一句となる。夢想の句には普通作者を付さず、句上げには「御」と記される。本作品で作者が無記であるのは当該句と次の第一句であり、これら二句が夢想の句となる。

さらに、傍線部に依るならば、句上げに見られる「御」は、天皇や連衆の中で最も立場が高い人物の句であることを示す御製句の意ではなく、夢想の句であることを示すための「御」となる。木村氏が「景勝も之に臨み」としたように直江の主君

である上杉景勝が詠者として想定されなくもないが、慶長期における直江の文学活動に彼の影は薄く、夢想句を感得するのは、脇句を詠む者である可能性が高いことを考えれば、直江兼続が詠者であろう。一句は、堂の一隅から俗世に出た、と詠む。

#### 1 年を経てなをえの松ぞさかふるや

「年を経て」は、『産衣』に「年をへてニ 春ハ来て同意也」とあること、慶長六年の立春は、当該作品興行の三日前、同年十二月十六日である。「なをえの松」は、「名を得」で、名松として賞翫されるの意。『竹林抄』に「名を得たることはりしるき月夜哉」(巻十・発句・一七四一・能阿)とある。また、「なをえ」には「直江」の名が掛けられる。一句は春が来て、あの名松のように「直江」の名も栄えることであるよ、と詠む。冬1 (年を経て)。

#### 2 吟春臘底梅 (春を吟ず 臘底の梅)

兼続

前句の「年を経て」が年内立春であることを踏まえ、陰暦十二月に咲く梅花(臘底梅)を付けて応じた脇句。なお、「梅<sub>ムメ</sub>」(漢和三五韻)の韻字により本作品の韻は「上平声十灰韻」に定まった。「臘底梅」は陰暦十二月に咲く梅のこと。『竹馬集』には「冬梅↓年内に立春、冬ながら立春」とある。『再昌』に「臘底如春山色青 野梅吐玉一枝香(臘底春の如くに山色青し、野梅玉を吐く一枝の香) (冬日即事・一一五六)。冬2 (臘底)。



3 詩○ 簾○ 先捲雪 (詩簾 先づ雪に捲ぐ)

元貞

前句の「吟」を、詩を吟じるの意に取りなして、「梅」に「雪」で応じた。「梅↓雪」(連珠合璧集)。簾の辺りで詩を朗詠する側で雪が舞う景を展開した。「詩簾」は、簾の近くで詩を吟じる意か。「先捲雪」は、雪が降るから、真つ先に簾を上げてその景を目にしたい、という意だろう。冬3(雪)。

4 雲に風ふく月のとを山

富隆

前句の「簾」を「捲」き上げると見える、遠方の山に昇る月の姿を付けた。「簾」なかもむる月、「雪↓遠山・月」(類船集)。また、前句の「簾」をめくりあげた「風」は月を覆う「雲」に吹いて、月の姿を露わにする。「雲に風ふく」は、雲に風が吹くことよって、雲が流れて空が晴れる。「春夢草」に「くもにかぜふくよはぞさびしき」(雑・八二三)。風が、遠山を遮っていた雲を流したので、遠くの山の姿もその山から出て来た月もはつきりと見えると詠む。秋1(月)。

5 雁がねはさくらのうへの峯こえて

隠其

前句の「風」にのつて、雁が秋に花をつけていない桜の木よりも高い峰を越えて帰ってくる姿を付けた。「白雲↓雁」、「月↓雁金」、「月↓峰」、「遠山↓桜」(類船集)といった寄合語による付けが目立つ。「さくらのうへ」という表現は、和歌・連歌例共に見られない。桜の木が植えられている場所よりも、高いところに位置している峯を雁が飛び超えて行くという意か。

桜の木がある場所も既に高いのだが、それよりも高い峯を雁は

超えて行つたと、その高さを強調する表現。秋に雁が峯を超えてやってくることは、「雁のくる峰の朝霧はれずのみ思ひつきせぬ世中のうさ」(古今集・雑・九三五)など。秋2(雁がね)。

6 波すさまじき江のとまり舟

実頼

前句の「雁がね」が飛び渡る眼下では、波が激しく立つ岸辺に繫留される小舟を、山の上空の景から地上の水辺の景に転じて付けた。「波↓雁かね」、「江↓雁」(類船集)。秋3(すさまじ)。

7 杳靄掩蘆屋 (杳靄 蘆屋を掩ふ)

印金

前句の「すさまじき」を荒涼としたの意に取りなし、その象徴である沿岸に建つ蘆屋を付けた。また、前句の舟が停泊している理由を「杳靄」(周囲を見えなくするような暗く濃い靄)が立ち込め、これ以上先に進めないからだ、と説明する付句となる。一句は、暗く深いもやが、葦で屋根を葺いた家を覆い隠す、と詠む。秋4(蘆)。

8 半庭○ 払緑埃 (半庭 緑埃を払ふ)

朝清

「半庭」は、庭の中央の意か。「錦繡段」に「柳塘漠漠暗啼鴉、一鏡晴飛玉有華。好是夜闌人不寢、半庭寒影在梨花。(柳塘漠漠たり暗に啼く鴉、一鏡晴れて飛んで玉に華有り。好し是れ夜闌けて人寝ねず、半庭の寒き影梨花に在り)」(春月・呂中孚)。「払緑埃」は「払緑苔」と同義か。白居易「秋興賦」の

「林間暖酒焼紅葉、石上題詩弘緑苔（林間に酒を暖めんとして紅葉を焼く、石上に詩を題せんとして緑苔を払ふ）」に基づく表現か。なお「苔」も灰韻である。雑。

9 しら露の玉のを柳みだれあひ

元能

前句の「半庭」に植わる「柳」の姿を付けた。「庭・緑↓柳」（類船集）。また、前句の「半庭」で「緑埃」を払っていたのは「柳」の葉先であったと前句に返る心。「しら露の玉のを」とは、玉のような白露を貫くひものこと。当該句では、その紐が切れたように白露が乱れ散るさまを表現するか。『新千載集』に「白露のむすぶもながき青柳の玉の緒とけて春風ぞ吹く」（春上・六三・法印定為）。春1（柳）。

10 そゝぐも見えぬ春雨の空

其阿

前句の「白露」は「春雨」が降ったことで置かれたと付けた。一句では、春雨は細かいので、降り注いではいるが上空には見えない、と詠む。春2（春雨）。

11 おぼろなる月の明がた雲引て

信能

「雲」が棚引くことで、「春雨」が降ったと前句に返る気持ちである。また、前句「見えぬ」に「おぼろなる月」が応じる。「おぼろなる月」であるのは当該句では明け方であるためとなるが、前句との関係では「春雨」が降り注いだためと解せる。春3（おぼろなる）。

12 好●友●興●相●催●（好友興相ひ催す）  
前句の「おぼろなる月」を受けて、明け方まで一緒にそれを賞翫し、感興を催させてくれる親友の存在を付けた。雑。秀定

13 山自遠方到（山 遠方より到る）

兼続

前句の「友」に「遠方到」で応じて『論語』の「有朋自遠方来、不亦楽乎（朋あり遠方より来たる、また樂しからずや）」（学而篇）に拠って付けた。一句の意は『枕草子』「山の端いと近うなりけるに」を下敷きに、遠方にある山が目の前にせまっているかのように見える、と解せるか。雑。

14 嵐○傍○深○戸○推○（嵐 深戸に傍ひて推す）

元貞

対句で展開した。嵐は奥深い場所にある家の戸までも遍く推し開くとその風の強さを詠む。雑。

15 まつ人はこぬ面かげの立うかれ

富隆

前句の「深戸」を開く主語を恋人に読み替えて付けた。待ち続けている恋人の訪れはなく、その人だろうかと思われる人の姿は現れたかと思うと、消えてしまうと恋のはかなさを詠む。雑、恋1（まつ人）。

16 けぶるばかりのおもひくるしも

隠其

前句の「まつ人」が来ないことによる愁いを「おもひくるしも」と受け、また「面かげ」が「けぶるばかり」である、と付けた。『新古今集』に「こぬ人をおもひたえたる庭のおものよ

もぎがすゑぞまつにまされる」(恋四・一二八七・寂蓮法師)。  
煙のようにはかない恋心を抱くのは苦しいと詠む。「おもひ」  
に「火」が掛けられ、「けぶる」と縁語となる。雑、恋2(おもひくるし)。

17 袖にあまる涙は露をかごとにて

前句の苦しい恋心のせいで、袖を濡らすほどに落ちる涙であるが、それは露のせいであると、言い訳する句を付けた。秋1  
(露)、恋3(涙)。

実頼

18 荒村嘯月回(荒村月に嘯きて回る)

前句で恋人の訪れがなく涙を流す女性に対して、まだ月が出ている時分に女性の元から帰る男性の姿を付けた。なお前句「かごと」を、荒涼とした村では月が綺麗なために逍遙して帰る、という意に読み替えて付けた。一句では、荒涼とした村で月下に詩を吟じながら逍遙する、という意。秋2(月)。

印金

19 壁間蛩唧々(壁間蛩唧々たり)

前句の「荒村」の家の壁のすき間でちゅちとしきりに鳴く蛩を付けた。「唧々」は蛩の鳴き声のことで、『三体詩』「宿杭州虚白堂(杭州虚白堂に宿す)」に「秋月斜明虚白堂、寒蛩唧唧樹蒼蒼(秋月斜めに明らかなり虚白堂、寒蛩唧唧、樹蒼蒼たり)」(巻一・李郢)。前句で月に嘯く声を蛩の鳴き声に取りなして応じた。秋3(蛩)。

朝清

20 ふもとの野辺の風さむきくれ

前句の蛩が、家の壁間で鳴いているのは、野辺を吹く風が冷たい暮れ方だからだ、と付けた。風が寒くなると前句の蛩の命もわずかであることを嘆く句。秋4(さむきくれ)。

能元

21 坐花紅染袂(花に坐せば紅袂を染めん)

前句の「ふもとの野辺」で座って花を賞翫すれば、花の紅色が袂を美しく染めると詠む。春1(花)。

秀定

22 斟杏緑浮醅(杏を斟めば緑醅に浮く)

対句で展開した。「醅」は、『漢和三五韻』引用の杜甫詩と注に「樽酒家貧只旧、注醅未漉(樽酒家は貧しく只だ旧し。注に、醅は未だ漉さず)」とあり、漉していない酒のこと。春2(杏)。

兼統

23 霞む日ほとくすむをも問よりて

前句の「杏」を「斟」むのは、春霞が立ち込める日に、遠くに住んではいるが、友人などを訪ねて来た人である、前句に返る心でと付けた。また酒と「霞」が縁となる。春3(霞む)。

実頼

24 遊轡苦驚駘(轡を遊ばせば驚駘を苦しめます)

前句で遠方から「問よ」る手段としての馬の様子を付けた。「遊轡」は、馬をあやつるために轡を取り付けること。「驚駘」は血統の劣った馬。雑、旅。

朝清

25 嶮<sup>●</sup> 棧<sup>○</sup> 常<sup>○</sup> 経<sup>○</sup> 蜀 (嶮棧 常に蜀に経) 印金

前句の「驚駘」が通る道を、秦の恵文王が蜀王を騙して敷かせた險阻(嶮棧)な「蜀の棧道」で具体的に付けた。李白が「蜀道難」で「噫吁戲危乎高哉、蜀道之難难于上青天(噫吁危ふきかな高い哉 蜀道の難きは青天に上るよりも難し)」。雑。

26 靈<sup>○</sup> 方<sup>○</sup> 好<sup>●</sup> 覓<sup>●</sup> 菜<sup>○</sup> (靈方 好く菜に覓む) 兼統

対句で展開した。「靈方」は優れた効能がある薬。「菜」は想像上の山の名で蓬萊山か。一句は、優れた薬をしばば蓬萊山に探し求める。雑。

27 平<sup>○</sup> 之<sup>○</sup> 仙<sup>○</sup> 市<sup>●</sup> 鶴<sup>●</sup> (之れを平らぐ 仙市の鶴) 元貞

前句の「萊」を蓬萊山の宮殿に取りなして、そこには仙人が住む、と付けた。「蓬萊院閉天台女(蓬萊の院は閉ざす天台の女)」(李煜・菩薩蛮)。雑。

28 かげも木だかく見ゆる松原 能元

前句の「仙市鶴」が止まる「松」の原っぱを付けた。「も」には松それ自体が高いことは無論だが、地面に映ったその陰も高く見える、と詠む。雑。

29 住吉や往来の袖のつゞくらむ 信能

前句の「松原」から「住吉」が導かれた(随葉集)。住吉詣に行き交う人の袖が連なっているのだから、と詠む。雑。

30 浦半の月にながめする暮 其阿

前句の「住吉」から「月」が導かれ(随葉集)、住吉の浦で月を賞翫する暮れ方の情景を詠む。秋1(月)。

31 霧<sup>○</sup> 晴<sup>○</sup> 磯<sup>○</sup> 上<sup>●</sup> 頭<sup>●</sup> (霧晴れて磯上頭<sup>きじょうごう</sup>る) 秀定

前句の「月」は霧が晴れた(霧晴)ことにより姿を現したものであった。「磯上」とは水際の石の多い場所。秋2(霧)。

32 引あととをし初塩の浪 富隆

前句で「磯上」が頭わになったことで、初塩の浪が引いていた跡が遠くの方まで見える、と付けた。秋3(初塩)。

33 種<sup>●</sup> 玉<sup>●</sup> 塵<sup>○</sup> 間<sup>○</sup> 鷺<sup>●</sup> (種玉 塵間の鷺) 兼統

前句で浪が引いた海辺の上に鷺がいる。「種玉」は「雪」の例えか。「塵間」は俗世のこと。雑。

34 いり日の末の野はかすか也 隠其

前句の「鷺」がいる「野」の様子を付けて、沈む日の光が野の端をぼんやりとさせている情景を詠む。雑。

35 宿からむさとはたく火をしるべにて 実頼

前句の日の入り方(いり日)に、宿を探そうしていると、人の気配がある里では焚かれる火がその目印となる、と詠む。雑、旅(宿)。

36 旅過●幾●崔○嵬○（旅に過る幾の崔嵬を） 印金

前句の「たく火」を目印にしながら、旅中、何度山の険しい路を通ってきたことか、と付けた。「崔嵬」は険しい路。雑、旅（旅）。

37 ほとゝぎす声やそことも分ざらん 能元

前句の険しい旅路（崔嵬）で、姿は見えないがどこからともなく聞こえる「郭公」の声を付けた。夏1（ほとゝぎす）。

38 ふりしきる夜の雨はものうし 信能

前句の「ほとゝぎす」から「雨」が導かれた。『新古今集』の「昔おもふ草のいほりの夜の雨になみだなそへそ山郭公」（夏・二〇一・藤原俊成）を意識するか。また、前句の郭公の姿が見えない理由を、雨がふりしきる夜であり、闇に紛れているからだ、と付ける。雑。

39 ひとりぬる枕に風の音信おとづて 富隆

前句の「ものうし」の理由を、独り寝の枕に吹く風のせいである、と付けて恋句で展開した。雑、恋1（ひとりぬる）。

40 忍履月相貽（忍びたる履月相ひ貽む） 元貞

前句の「音信て」を受けて、地面に映った月の影を「履」が踏みながら、月光を頼りに女性の元から帰る或いは、女性を訪ねる男性の姿を付けた。秋1（月）、恋2（忍）。

41 沙○砌●露●降●湿●（沙の砌露降りて湿なり） 朝清

前句の「月」の光が映る「砌」は、露が降りて湿っている、と詠む。また、前句の「履」と「貽」から、「砌」が導かれた。秋2（露）。

42 秋もくれまつ鞠のかたらひ 実頼

前句の「沙砌」から「鞠」が導かれた。『随葉集』に「鞠の音」には「砌の真砂」。日の入り方が早い秋であっても、鞠の遊戯が終わるまでは、宵になるのを待っていてくれるのだ、と詠む。秋3（秋）。

43 落●楓○舗○地●錦●（落楓地に舗く錦） 印金

前句の「秋もくれまつ」に対して、楓が散って地面を錦のように美しくしている秋の暮れの景を付けた。秋4（楓）。

44 下●若●画●雲○疊○（下若雲に画く疊） 兼統

対句で展開した。「下若」は酒。「疊」は、酒を入れる樽のことで雲の模様もようが刻まれた。『漢和三五韻』が引用する『説文』に「龜目酒尊刻木作雲雷象（龜目の酒尊、木を刻みて雲雷の象を作る）」とある。雑。

45 白●也●出●唐○鳥●（白や唐を出づる鳥） 元貞

前句の「疊」を盃などの酒器をさす「白」で受けたか。或いは、「疊」に画かれる雲上を飛ぶ伝説上の鳥の姿を付けたか。或いは、「白」は「白頭」のことで、鍾離春という宣王の正后

のことか。「其人爲也、極醜無雙而、白頭深目、長枝大也（其の人と爲りや、極醜無雙にして、白頭深目、長枝大なり。）」  
〔列女伝〕弁通・斉鍾離春の伝。雑。

46 鮭之入羽能（鮭は之れ羽に入る能） 秀定  
対句で展開した。「鮭」は、夏の禹王の父で、堯帝の命で大

水を治めようと試みるが失敗し、舜帝によって追放された人物。幽閉された場所が羽山であり、「入羽」と詠まれる。なお、「鮭」は想像上の大魚の名で、「能」は亀に同じとされる（漢和三五韻）。「鮭」のことを、水辺の伝説上の生物に見立てた表現か。雑。

47 さすらふるその行衛こそ悲しけれ 隠其  
前句の「鮭」を伝説上の夏の禹王の父に取りなした。彼が治水工事に失敗し、帝舜に殺された後の行き場のない一族、家臣らの悲哀を詠むか。雑。

48 一夜のほどに老となりぬる 其阿  
前句の「さすらふる」と「悲しけれ」を受けて、流浪しているうちに一晚にして老いてしまったと月日の流れの速さを嘆く老境の句を付けた。雑、述懐（老）。

49 不改旧花耳（改まざるは旧き花のみ） 兼統  
前句ですっかり老いてしまった我が身を嘆く句に対して、昔

から咲いている「花」だけはその美しい姿を保っている、と付

けた。春1（花）。

50 はるをこゝろの哥のしなぐ 富隆  
前句の「花」を和歌に詠む春は、それらを詠う人の位（し

な）によって様々にあると付けた。つまり人々は各々の春、身分相応の春を過ごして歌を詠むという意か。人のしな（身分）は変わるが、「花」の美しさは変化することはない（不改）と対比する。春2（はる）。

51 永日もしたしき中はそひあかて 其阿  
前句の「哥」を詠む仲間を「したしき中」と付けて、一日が

長く感じられる春の日であっても、親しい仲間であれば一緒にいても飽きない、と詠む。春3（永日）。

52 おもふをゝきて旅だつはうし 信能  
前句の「したしき中」である人との別れがあるので、旅立つ

ことがつらい、と付けた。「おもふをゝき」は、相手を想う気持ちが深いということか。用例は稀だが陽明文庫本『大発句帳』に「かぜををきてかりのこゑまではぎのつゆ」（秋・四五〇）とある。「旅だつはうし」の主体は、次句が舟を見送る側が主体となるので、当該句では旅立つ人が主体と考え、親しい人に対する想いが深く、旅立ちによる別れをむかえるのがつらい、と解した。雑、旅（旅だつ）。

53 載恨行舟重（恨みを載せて行舟重し） 元貞

前句の「おもふをゝき」を旅立ちを見送る側の別れに対する恨みの気持ちととり、それを載せる舟を「重」しと形容した付句。当該句と類想的な和漢聯句に「載景軽舟重（景を載せて軽舟重し）」（享祿元年十月五日和漢百韻・四五）がある。雑。

54 投閑書卷開（閑に投じて書卷を開く） 朝清  
対句で展開した。「投閑」は、静かな環境に身を置くことで

「翰林五鳳集」に「世路危於經劍關 何如市隱獨投閑（世路は劍関を經るより危し、何ぞ市隱の独り閑に投ずるに如かん）」（和福壽菴主南嶺・瑞溪周鳳など。「書卷」は冊子と卷子のことで、書物を指す。和漢聯句に「愛靜翫書卷（靜を愛でて書卷を翫ぶ）」（天正十四年十二月七日漢和聯句・五九・西笑承兌）。静かな環境に身を置いて、書物を開く、と詠む。雑。

55 まちいでゝ月にむかへる窓のうち 実頼  
前句で「書卷」を開いて読んでいる場所は「窓」の側である、と付けた。また、前句ではその窓から差し込む「月」の光で「書卷」を読むという関係になる。一句では、窓の内側で月の姿が出てくるのを待っていたところに、ようやく出てきた月に対座すると詠む。『顯証院会千句』に「まちいでてしづかにむかふよはのつき」（第二・七九）と類似句がある。秋1（月）。

56 涼しくなれる秋のゆふ暮 富隆  
前句の「月」から「涼」が導かれる（類船集）。「涼しくなれ

る」は体感として涼しさを感じるという意と、前句の「月」の光が冷やややかであるという意が掛かる。秋2（秋のゆふ暮）。

57 ながれぬる汀の柳ちりそめて 隠其  
前句で「涼しく」なって、柳が散り始めた、と秋が深まるさまを付けた。柳は夏の季語だが、『産衣』に「柳散ハ秋也」とあることから、当該句では秋の季語となる。例えば、連歌に「袂すずしき秋になるころ／下葉より砌の柳散りそめて」（文祿年間百韻・二九）。秋3（柳ちり）。

58 一蓑帯雨来（一蓑雨を帯びて来たる） 秀定  
「一蓑」で、蓑笠を着ている人を表現し、雨の中を進むさまを詠む。雑。

59 泰雲雖寸々（泰雲 雖だ寸々たるのみ） 兼統  
前句の「雨」を受けて、それを降らせた「雲」がゆつたりと（泰）、途切れ途切れに（寸々）空に浮かぶさまを付けた。雑。

60 まつるに神や世をめぐむらん 実頼  
前句の「泰」を古来、天子が即位のときに天地をまつる儀式を行う「泰山」に取りなした。そうした儀式を経て為政者となった人の治世に神が、世の中に恵みをもたらしてくれるだろう、と詠む。また「雲」に「神」が寄り合う（類船集）。雑、神祇（まつる・神）。

61 おさまれる國はやしろをいはひそへ 能元

前句で「世をめぐむらん」と推測したことが、当該句で國が治まり実現した、と付けた。また前句の「神」を「まつる」先が「やしろ」とである、と詠む。類想的な展開が『菟玖波集』に「くにまつるたからをいまもおさめおく／いくよをふるのやしるなるらむ」（巻七・五八七）がある。社を祀れることは、國が安定している象徴となる。雑。

62 松○於○岩○栽○ 松は岩谷に栽め 元貞

前句の「いはひそへ」を受けて、永年を象徴しそれを寿ぐ「松」を付けた。「岩谷」は岩石の聳えた峡谷のこと。『臨濟録』に「巖谷栽松、後人標榜（巖谷に松を栽へ、後人標榜す）」など。「栽」は『漢和三五韻』に「ウユル」。雑。

63 遠○鐘○風○是○杵○ 遠鐘風は是れ杵となる 印金

前句の「松」から「鐘」が導かれる（類船集）。吹く風が杵の代わりに遠くの鐘を鳴らすのだ、と詠む。『翰林五鳳集』に「遠鐘幾杵半天風。吹落溪橋西又東。（遠鐘幾ばくの杵ぞ半天の風、溪橋に吹落つ西又東）（遠寺晚鐘・琴叔）がある。雑。

64 芳○茗○雪○其○磴○ 芳茗雪は其れ磴なり 兼統

対句で展開した。「杵」と「磴」の対比が意識される。『易経』に「断木為杵、掘地為臼（木を断ちて杵と為し、地を掘りて臼と為す）（繫辞下）。「雪其磴」とは、積もった雪を掘ってそれを磴の代わりにすることか。「芳茗」は香り、品質のよい

茶のこと。一句は香りの良い茶を、雪の磴で挽くという意か。冬1（雪）。

65 禪○識○無○能○味○ 禪識能く味わうこと無し 朝清

前句の「芳茗」（茶）から「禪」が導かれたか。和漢聯句に「よろづうき世ぞ思へ身のはて／禪榻茶煙淡（禪榻茶煙淡し）」（応永元年十二月十二日後小松天皇独吟和漢百韻・八九）。一句は、禪僧は食べ物には、必ずしも美味しい味ばかりではないことを心得ている、という意か。雑。

66 むまれながらにおこなへる道 隠其

前句の「禪」に「おこなへる道」を付けた。「むまれながら」は、この世に生を受けた時からの意で、連歌に「のりはただうまれながらのみなれかし」（伊勢千句・第七・六三）。一句は、生まれた時から修行をする人生である、と詠む。雑、釈教（おこなへる）。

67 鶯の巢をはなれずも声たて、 其阿

前句の「むまれながら」を受けて、まだ巢立ちをしていない「鶯」の声が付くか。時代は下るが『崑山集』に「むまれながらやうぐひすの法の声」（春・六〇四）がある。春1（鶯）。

68 竹のはやしの春寒きころ 信能

前句の「鶯の巢」がある場所の余寒を付けた。「竹↓鶯」（類船集）。「竹のはやし」という表現はやや説明的ではあるが和



歌に、「風ふけば竹の林の友なりにふしやわづらふ夜半のうぐひす」(夫木抄・春部二・竹林鶯・四五八・源伸正)など。春2(春寒き)。

69 山ずみも霞をくめる伴ひに

富隆

前句の「春寒きころ」には「竹のはやし」に住む者(山ずみ)も酒(霞)を酌み交わす相手となる、と付けた。竹林の七賢のイメージ。「山ずみ」は山中や山里にすむ人のことで、『新明題集』に「外よりは淋しとみるも山住の友なりけりな灯の影」(雑・四二二四・信慶)。「霞をくめる」は、酒を酌み交わすことで、連歌に「あかなくもしひてかすみをくむそでに」(永祿石山千句・第五・七九)など。春3(霞)。

70 茅齋月作媒(茅齋月 媒と作る)

秀定

前句で酒の異称として詠んだ「霞」を、当該句では実際の霞に取りなした。霞が晴れて見える「月」の姿を詠む。前句で酒を酌み交わしているような隠者は、互いが遠くに離れていても月が彼らの交流の「仲立ち(月作媒)」をするのだ、と受けたか。「茅齋」の「齋」は書斎の意だが、茅葺の庵のようなものか。一句は、茅葺きの家では、月光が男女の仲を取り持つのだ、と詠む。秋1(月)、恋1(媒)。

71 妾衣先襯露(妾衣先づ襯露たり)

元貞

前句の「茅齋」で待つ女性の涙(露)を付けた。「襯」は、はだ着のこと。一句は、妾の着物は(悲しみのために)まず、

はだ着から涙に濡れるのである。秋2(露)、恋1(妾)。

72 身にしめつゝもまつはいく秋

実頼

前句の「妾」が男性の訪れを何年も待つ思いを付けた。「身にしめつゝも」は連歌に見られる表現で、『嵯峨千句』に「みにしめつゝもうらみよらばや」(第六・三〇)。「まつはいく秋」は、和歌では「松はいく世」という表現で見られるが、当該句では句意から「待つ」の意。一句は、秋を心に深く感じながら過ごすが、恋人の訪れを待ち過ごす秋は何度めか、と嘆く句。秋3(秋)、恋2(まつ)。

73 虚夕刻其歳(虚夕 其の歳を刻む)

兼続

前句で、期待して待ち続けている恋人がなかなか訪れない、夕暮れ時の時間の虚しさを付けた。「虚夕」は寂しさを感じる夕暮れ時のこと。『和漢兼作集』に「暮煙晴色攢松嶺、夜雨虚夕落葉窓(暮煙晴色松を攢むる嶺、夜の雨虚しき夕べ落葉の窓)」(秋・秋於大原勝林院言志・八七三・積漸空)、『新拾遺集』に「初雪のふらばといひし人はこでむなしくはるる夕暮の空」(冬・六五四・前大僧正慈鎮)など日本の詩と和歌に見られる。雑、恋3。

74 旱天夏以雷(旱天 夏は雷を以てす)

印金

「旱天」は、日照りが続き、雨が降らないこと。一句は、日照りが続く日に雷が轟きすつかり夏の季となったことを告げると詠む。夏1(夏)。

75 山たかみ雲のかさなる曙に

前句の「鳴神(雷)」から「浮雲」が導かれた(随葉集)。高い山の頂の上で重なる雲から「雷」が落ちる、と前句に返る心である。雑。

隠其

76 棹●舟●過●水●隈●(舟に棹さし水の隈を過る)

前句の明け方(曙)に舟を漕ぐ景を詠み、山から水辺の景に展開した。「隈」は、水が滞留している場所。一句は、水が滞留する場所では、棹をさして舟を進ませる、と詠む。雑。

元貞

77 ちりうかぶ花や岸根に淀むらん

前句の「隈」を受けて、そこに散る花が岸根に留まるだろうと思ひ遣る句を付けた。「小舟」と「岸」が寄合(類船集)。

能元

「岸根」は、岸と水が接する場所で和歌に「吉野河ちる桜あれば咲きつぎて岸根色どる山ぶきの花」(新明題集・春・款冬・一〇六七・資茂)など。散った花が「淀む」と詠む和歌に「ちりつもる花こそいはによどむ共かはながれてやせにかほらん」(散木奇歌集・五六・俊頼)。春1(花)。

78 和暖●杖●徘徊●(和暖杖徘徊)

前句で岸根に溜まった「花」に見入って、歩みを止める人の姿を付けた。「和暖」は穏やかな陽気のこと、和漢聯句に「愛山和暖鞍(山を愛づ和暖の鞍)」(天文二年六月七日和漢聯句・一二)など間々見られる表現。「杖」は人が歩むさまを物に仮託した表現で、これも和漢聯句に屢々用いられる。「老擲

兼統

深春杖(老は擲つ深春の杖を)「明応二年四月十四日和漢百韻・九一・蘭坡」など。「徘徊」は、歩みを止める意で、『漢和三五韻』の「徊」の脚注に「徘徊不進貌」とあることに拠る。春2(和暖)。

79 蛙なく堤のあたり暮初て

前句で立ち止まっていたら、辺りは日が沈み始め蛙が鳴く時分となった、と付けた。類想的な和歌に「くれふかきいりのつみのした水に声うちそへて蛙なくなり」(為尹千首・夕蛙・一六五)。春3(蛙)。

隠其

80 すきのこしたるを田のかたへ

前句の「堤」を「田」のそれと取りなし、小田のあちらこちらには、土を掘り返していない場所がある、と付けた。また「蛙」から「田」が導かれる(類船集)。「産衣」に「田を返す、田をすくハ共に春なれば」とあることから季節は春。春4(すきのこし)。

能元

81 民村●烟●半●起●(民村烟半ば起つ)

前句の「田」の側にある「民村」の景を付けた。「民村」は、民衆が住んでいる村落のこと、和漢聯句に「霞灑民村賑(霞灑きて民村賑かなり)」(長享元年十二月二日和漢百韻・九九)など。「烟半起」は、民家の煮炊きの煙が空の中ほどまで立ち上っている様子。雑。

秀定

82 駅路日将類 (駅路 日将に類れんとす) 印金

対句で展開した。「駅路」は宿駅の設けられている街道のこ  
と。「類」は『漢和三五韻』の脚注に「説文 禿、貌 一、曰暴  
風」とあり「ノワキ」の訓があるが、ここは句意から「くずれ  
る」と訓読して日が暮れるさまと解した。和漢聯句に「村遠日  
西類(村遠し日は西に類れる)。(大永二年六月三日和漢百韻・  
六八・竹)など。雑、旅(駅路)。

83 鈴舟のよる音すまの浦ちかみ

実頼

前句の「駅路」から「鈴舟」を導いた。「鈴舟」とは『藻塩  
草』(二七・船)に、「すず船 鈴舟とはむまやぢの舟の事也」、  
『産衣』に「鈴舟 旅也。哥註二舟に鈴を立る事也。源じすま  
へ趣き給し時、鳥羽より舟に召されけるに、其舟に鈴を立てら  
れける。惣じて公卿殿上人の乗る舟にハ鈴を立る也と有。」と  
あり、通行手形となる鈴をつけた官船のこと。須磨の浦を通る  
鈴舟を詠む和歌に、「すずぶねをよするおとにやさわぐらんす  
まのうへのにきぎすたつなり」(千五百番歌合・雑・一四五五  
番左・二九一〇・顕昭)。一句は、鈴舟が近づいてくる音が聞  
こえるのは、須磨の浦が近いからだ、となる。雑、旅(鈴舟)。

84 秋風白髮衰 (秋風 白髮衰ふ)

元貞

前句の「鈴舟」は「秋風」によって進んでいた、と付けた。  
「風↓船」(類船集)。一句は、ただでさえ年老いて白くなる髪  
が、秋風によってより一層衰えてしまふ、と詠む。秋1(秋  
風)。

85 松□しの鳴そふまくらねぎめして 其阿

前句の「秋風」に乗って「松虫」の音が聞こえて目が覚めて  
しまふ、と付けた。「松虫↓秋風」(合璧集)。寢床で松虫の声  
を聴く、と詠む和歌に「折しもあれ身にしみまさる枕かな秋か  
ぜふかき松虫の声」(今川氏真詠草・深夜虫・一八〇)など。  
秋2(松むし)。

86 新奇得月臺 (新奇 月を得る臺)

兼続

前句の「むしの音」から「月」が導かれる(類船集)。和漢  
聯句において当該句のように一句に「月」と「新」、「奇」を詠  
み込む句が見られる。「月新興愈奇(月新しく興愈よ奇し)」  
(天正六年九月二十五日漢和聯句・四・周寔)の例から、「新  
奇」とは素晴らしい新月のことか。「臺」は、屋根のない楼の  
ことでそこで月を眺める。秋3(月)。

87 池ひろきかたへはなみの声もなし

信能

前句の月を映す池の様子を付けた。「池↓月」(類船集)。水  
面が波立っていない(なみの声のなし)から、前句の月が綺麗  
に映っている。「池ひろきかたへ」とは広大な池の一部分のこ  
とで、和歌では池に張った水の一部分が溶ける例で屢々見られ  
る。「ふゆとはるとゆきかふかせのいけ水にかたへとけゆくう  
すごほりかな」(千五百番歌合・冬・一〇二九番右・二〇五  
七・内大臣)など。雑。

88 床をかさぬる水のうき鳥

富隆

前句の「池」に浮かぶ「鳥」の姿を付けた。「池↓水鳥」(類船集)。「床をかさぬる」とは、雌雄の鳥が仲睦まじくねぐらを共にしていることで、『大発句帳』に「をしのなとこかさなれるねぎめかな」(陽明文庫本・七一八九)など。雑。

89 舟過山走馬(舟過つて山に走る馬) 印金

前句の水辺を通る舟と、山を走る馬を詠み、水辺と山の景を一句の中で対比的に詠む句。雑。

90 くるゝあらしにはやき雲あし 隠其

前句の「山」から「嵐」が導かれた(類船集)。また、前句の馬がはやく走ることと縁となつて、景色がはやく流れることと併せて慌ただしい様を付けた。「くるゝあらしに」とは夕暮れ時の嵐のことか。連歌に「あらしにくるる」という形で「あらしにくるるそでのさむけさ」(太神宮法楽千句・第六・六)とある。「はやき雲あし」とは、空に雲が速く流れるのは雲が速く流れる、と詠む。雑。

91 笛近牧婦否(笛近けれども牧婦るや否や) 朝清

前句で夕暮れとなり、嵐も来る気配があるので、牧童がそろそろ笛を吹いて帰る頃なのだろうとか思い遣る句。「笛近」とは牧童が吹く笛の音が近くに聞こえるという意で、前句からの展開も当該句と類似する和漢聯句に「くるればあらし山風ぞふく／猿誤帰樵笛(猿かと誤る帰る樵の笛)」(天文十年月日未詳和漢聯句・七・梅子)がある。一句は、牧童が吹く音だけは確

かに聞こえるが、その姿は見えないことを詠む。雑。

92 □□女美哉 元貞

93 「」過來し□□□□もはれて 能元

94 空閨日厚苔(空閨日に厚き苔) 秀定

「空閨」は、異性の訪れが無い独り寝のこと。「日厚苔」とは、恋人の訪れがないため、日々路の苔が厚く積もる、という意か。恋(空閨)。虫損がある92句は「女」で恋句の一つ目となり、当該句まで恋句となる可能性が高い。

95 岩がねにたえず雫や音すらむ 信能

前句の「苔」から「雫」が導かれた。「産衣」に「雫ニハ石か、苔か、山など結てすべし」とあることに拠る。また、和漢聯句に「懸樋の水のたえくの音／岩がねのしづくは苔にむすぼくれ」(天文二十三年一月二十九日和漢聯句・七一・四辻中納言)。一句は、大きな岩に絶え間なく、雫が落ちる音がするのだろう、と詠む。雑。

96 ながれはほそきさは水のすゑ 其阿

前句の「岩がね」に水が滴るのは、沢水の流れがあるため、と付けた。「岩↓水」(類船集)。雑。

97 歌堯村校楽(堯を歌ひて村校楽し) 兼続

前句の沢水の下流域近くの村の様子を付けた。「歌堯」は、聖天子の堯が治める世は平和であると寿ぐこと。和漢聯句では「ゆたかにみゆる民のつくり田／世歌堯与舜（世は歌ふ堯と舜を）」（文明十四年四月二十二日和漢百韻・四五・御土御門天皇）のように同じく聖天子の「舜」の名と共に詠まれる。「村校」は村の中にある学び舎のことで、和漢聯句に「村校学孜々（村校学び孜々たり）」（弘治二年八月和漢千句・第五・六〇）。一句は、堯が治める世を寿ぎ、村中の学び舎は愉しげであると詠む。雑。

98

〔達力〕〔欲力〕

〔晴力〕

〔印金力〕

99

二月はるのなかばの花を折がたし

実頼

前句が判読不能であるが、「鳴」の主体は「鶯」で、「花」を導くか（類船集）。如月の中旬頃に咲く花は、春の盛りの頃のものであるから、手折るのもつたいないと詠む和歌に「吹く風ものどけきころと二月のなかばにかかる花ざかりかな」（隣女集・春・一〇〇六）など。前句の季は断定し難いが、式目上、春は最低三句続けるべきことを鑑み、当該句は春の二句目とした。春<sup>2</sup>（二月・花）。

100

春○到●必●豊○財○（春到りて必ず豊かなる財となる）

朝清

前句とは、明確な奇合語はないが、春の句で付けた。「必豊財」は、春の情景が豊かとなり、それはまるで財宝のように美しいものである、と詠む。祝言の挙句である。春<sup>3</sup>（春到）。

## おわりに

最後に本百韻の特徴をまとめる。

まず、百韻全体の四季と恋句の句数と句去りに違反は見られない。なお句の一部が摩滅している92句・93句・98句の季は注釈の通りに推測したが、それを踏まえても四季と恋句の句数・句去りは遵守されていると言えるだろう。

平仄については内容の読解に支障はないが、全体として孤平が目立ち、14句・41句、45句・49句・54句・62句・91句の全七箇所に見られる点は見逃せない。これは同時代及び室町期の主に禁裏の和漢聯句においては、ふつう百韻に一所あるか否かという頻度であるので、そうした事象と比較すれば、当該百韻は平仄の遵守が徹底されているとは言い難い。

句の詠みぶりは具体的にはどうかであろうか。31句「霧晴磯上頭」は漢句ではあるが、「霧が晴れて磯の石が見えるようになつた」と詠み、漢籍の典拠を用いることなく、和歌的な情景を詠む。和歌の要素が漢句に波及している例と言えるだろう。

直江は、やはり手堅く漢籍を典拠として用い、故事を下敷きにする傾向にある。13句で『論語』、64句で『易経』・97句では聖天子の堯を取り上げる。この傾向は文禄年間の和漢聯句にも見られた特徴であった。

なお、彼が78句の「徘徊」を「たちやすらふ」と訓じて、立ち止まる、という意で詠んでいる点は、身近に韻書を置いて実作していたことを窺わせる。

直江の実弟の大国実頼は、漢句から和句への取りなし方の手

際が鮮やかである。とくに、41句から42句、59句から60句、82句から83句では、前句との関係を保ちつつも、新たな世界観を一句立てて表現することに成功している。彼は直江と共に出席することは稀である。だが、文禄年間には都において毎年連歌会を主催し、連歌師の里村家と同座していた事蹟が確認できる。彼の勘所をおさえた句の詠みぶりは、そうした会で鍛えられたのであろう。

「夢想」の聯句は会の終了後に神仏等に供えるのが通例である。直江等にとり、この会を興行する意義とは何であったのか。定説では米沢減封を受けて家臣らの一致を團結する目的があったとされ、減封の時期からみても、当該聯句の連衆と「亀岡百首」の参会者の重複からみても、そのように解するのが自然であろう。

さらに、この会の隠れた目的に大國実頼の出奔を阻止する狙いがあった可能性も否定できない。続けて翌年二月に催される「亀岡百首」にも大國氏が出席し出題者となっている。天正年間から直江の主催する会と大國のそれとは別々であったのが、この時期に立て続ける会と大國と共に会を執り行う。結局は大國氏は出奔してしまふのだが、表向きは上杉家臣団の團結と詠い、神仏に奉納するための文事の開催が目的であったにせよ、その裏には大國氏の出奔阻止という狙いもあったのではないだろうか。このような点を含め、後考を俟ちたい。

## 注

特に断らない限り記録・文書などの史料は校訂刊本に、歌集・定数歌

は「新編国歌大観」に、家集は「私家集大成」に拠った。引用本文の表記は私に改め、傍線等を付した場合がある。

(1) 「公はしばしば和漢聯句百韻の会を催す」とあるが、三句のみ掲載。今井清見氏（二八八三年〜一九四四年）は、米沢市史編纂委員を務めた人物。

(2) 今井氏が、「直江城州公伝」を執筆する際に必要とする情報、資料を書き留めていた資料群。「史料抜抄」三（K212・1）、「直江史料」（K289・1、一九三八年）など。資料は未整理の状態ものも多く、「直江筋書」第二巻には請求番号が付されていない。

(3) 「慶長六年の減封以降、錯綜した仕事の中で聯句を催す悠々たる文雅の心」「敗軍の将とも思えぬ優雅さの中にも、一藩あげて戦後の復興を目指す悠揚たる気概、これまた見事である。」（米沢市史第二巻・近世編1）。

(4) なお、慶長期に直江が関与した連文芸の一つに両吟連歌が存することも明らかとなっている。拙稿「市立米沢図書館蔵慶長三年（一五九八）三月二日賦何人連歌「しめゆふや」注釈―新出の直江兼統・称念寺其阿両吟連歌の紹介―（慶應義塾高等学校紀要第四九号、二〇一八年）参照。

(5) 本作品の所蔵者に関して、中山小太郎は、高田家の家臣団にも同姓同名の人物がいるが、その人物ではなく、「米沢地方の古文書・骨董の蒐集家ではないか」と市立米沢図書館郷土資料室の青木氏よりご教示を賜った。現在、東京大学史料編纂所で中山小太郎所蔵史料とされているものは、上杉謙信書状（天正二年三月二十八日景勝朱印状（天正十一年霜月日）北條氏直書状（天正八年七月二日）など八点。「夢想和漢聯句」を含め九点となる。

(6) 拙稿「戦国期の詩歌百首―「亀岡文殊堂奉納詩歌百首」について―」（和歌文学研究第一二六号、二〇一七年）参照。

(7) 前掲注（6）参照。

(8) 伊地知鑑男氏「連歌の世界」（日本歴史叢書、吉川弘文館、一九六七年）参照。なお諸社法楽・供養追善などの経文名号、夢想連歌などの場合は、賦物の行りの個所に「北野社御法楽」「名号之連歌」

または「夢想之連歌」などと書く夢想が、和歌一首の場合は上句・下句を各二行書きにするし、上句のみの時は「脇起し」といって脇句から詠みはじめる。夢想の句や御製には普通作者名は付さない。

(9) 前掲注(6)参照。

(10) 鶴崎裕雄氏「夢想和歌・連歌・学際的研究を目指して」(國文學第一〇一号、関西大学国文学会、二〇一七年)参照。

(11) 発句、脇句、第三の当座性について。季節は年内立春であるが「冬」でとるべきか。「春」にすると最低三句続けるべきであり、そうすると第三の季節は「雪」を偽物の雪にしなければならない。脇句の「再昌」の詩は「冬日即事」とあり、冬。

(12) 小川剛生・川崎美穂・出村奈那恵「直江兼統一座倭漢聯句百韻」(「楓散風紅色」注釈)三田國文第六〇号、二〇一五年)参照。

〔付記〕

貴重図書翻刻と写真掲載の御許可を賜りました慶應義塾大学図書館貴重書室に篤く御礼申し上げます。

(かわさき みおん)